

真弓

あのう、強盗に説教されるような気分って、わかります？

幸介

ああ、強盗に……戸締まりの説教をされるような……

真弓

そうです。強盗はまず自分自身を反省しろ。私はそう言いたいですね。

幸介

でも、強盗じゃなかったでしょう？

真弓
は？

幸介

僕ですよ。……あなた、僕の持ち物検査したじゃないですか。

真弓

……

幸介

あの日、初めて来た日、あのまま風呂に入らなかったんです。タオルを汚しちゃ悪いような気がして、自分の取りに上に上がった。そうしたら、あなたが僕のズタ袋を……

真弓

……

幸介

怪しい書類なんて、なかったでしょう？ 実印を使って戻すような……

真弓、答えず、二階へ上がる。幸介、そのままいる。

3

一週間後。日曜日の午後。

保が階段を下りてくる。すぐ続いて、登紀子。

登紀子

いい部屋だよねえ。見晴らしもよくって。姉さん、あんなところで暮らすこともできたのに……

保

ええ、何度も誘いはしたんですが……

登紀子

そりゃあだつて、幸介ちゃんがさあ、もしも戻ったらつて、そういうのがあったから……

保

おふくろも馬鹿ですよ。あんなのを待つて、千羽鶴折ってたんだから……

登紀子

私も手伝わされたわよ。広告のビラため込んで、真っ四角に切つてねえ。真っ四角じゃないつてよく怒られた……

保

それだけ待つてた兄貴がようやく現れたんです。叔母さん、ここはどうか、おふくろの気持ちを……

……

登紀子

遅かったよねえ、出てくるのが。あと一年早かったら、姉さん、会うこともできたのに……

保

ええ、兄貴もそのことは……

登紀子

弥生町の家はさ、チューリップが咲いて、クロッカスが咲いて……それをさあ、あんなちっちゃいアパートに移つて……

保

電話番号だけは変えないつて頑張りましてねえ……

登紀子 そりやあだつて幸介ちゃんがさ、もしもかけてきたらつて……

保 おふくろが、それだけ待つてた兄貴なんです。叔母さん、聞いていただけませんか？

登紀子 (用心深い顔になり) まず、お父ちゃんに聞いてみないとさあ……

保 ええ、ですから、聞いていただけないかと……

登紀子 あれ、何しに來たんだっけ？

保 あ、そこです。その奥を左……(と、トイレの位置を指し示す)

登紀子 遅かつたよねえ、出てくるのが、せめてあと一年早かつたら……(と、首を振り振りトイレへ)

百合子が階段を下りてくる。

百合子 叔母さん、何だつて？

保 出てくるのが遅かつたつて……

百合子 またあ。壊れた蓄音機とはよく言つたよ。

保 断りにくそうな気配ではあるんだ。あとひと押しですよ。

百合子 募集の貼り紙出してゐるくせに、しぶといよねえ……

保 まあ、これで断つたら角が立ちますよ。

百合子 真弓ちゃんも、もうちよつと観察力がほしいわねえ。叔母さん、用心深いんだから、母さんのセンから責め崩すしかないのに、すぐ幸介のセンに戻すでしょう……

保 売り込もうとしてくれてんだよ。熱意は認めてよ。

百合子 真弓ちゃんのこと、頭いいつて思つてたけど、はつきり言つて逆なんじゃない？ あの正論

は、鈍くなきや吐けないよ。

保 そこまで言う？ この私の妻に対して……

百合子 人情の機微がわかんないもん、物書きとしちゃ致命的よ。アトラスから仕事来なくなつたんだつて、あの恐るべき正論のせいじゃないかつて……

保 あれはアトラスが悪いよ。俺は全部聞いてるし……

百合子 真弓ちゃんから聞いてんでしょ。アトラスの身にもなつてごらんよ。下手な物書きに、まっしぐらの正論でガンガンやられたんじゃ……

保 ……

百合子 学校でだつてどうなの？ あの離婚狼とまっしぐらやつて、孤立してんじやないのかなあ。ファームステイだつて、遅しくなるどころか、おかしくなつちやう子もいるのよ。牧場だあ、大自然だあ、腕白でもいい、遅しくしたらつて、真弓ちゃん、そういうのはめつぱう弱いから……

保 あれは、ウィルソン先生の実家だよ。マリコ先生も一緒だし……

百合子 シロウトさんだつてことでしよう。ちゃんとした業者の、経験ある人がやつてんのと違うんだから。あんなのに三十何万も投資して……

登紀子、戻ってくる。

百合子 叔母さん、すみません、本当にもう……

登紀子 いいのよ、久しぶりに来てみたかつたし、オイテテテ……（と、少し膝をかばいながらソファに腰を下ろす）

百合子 お膝、やっぱり痛いんじゃないの？

登紀子 ううん、大丈夫。

保 悪かったなあ、畳に座ったせいでしょう？

登紀子 痛くないから座ったのよ。いい眺めできあ、姉さん、あんなとこで……

百合子 叔父さんも腰痛、ひどいんでしょう？

登紀子 だましましたしやつてるわよ。ここんとは、それほどじゃないしね。

百合子 母さんさ、叔母さんちに泊まり込んだことあったじゃない。叔母さんが膝痛くって動けなくなつたとき……

登紀子 あのとときは参っちゃったわよ。水抜いたはいいいけど、靴まで作るつてんで、型とつてさあ、三万六千円だったかな？

百合子 そうそう、それで母さんが手伝いに行つたでしょう……

登紀子 悪いからいいつて言つたのに、向こうから来てくれちゃつて……

百合子 （保に）いい気晴らしになつたつて喜んでたよねえ。

保 一か月も店番やつたとかつて、何回も何回も聞かされたよなあ……

登紀子 繰り返す人だったよねえ、でもね、私は黙つて聞いてあげた。初めてみたいなふりしてね。

繰り返して繰り返して、それで気がすむんならさあ……

百合子 こっちはたまになかつたわよ。配達まで手伝つたつて、あの繰り返しは……

保 ああ、叔父さんが腰痛出ちゃつて……

登紀子 この頃は配達も楽なのよ。小口の注文ばつかでさ、飲み屋もスナックも軒並み景気悪いからねえ。

百合子 でも、叔母さんも膝が痛いんだから、お店の中の仕事だつて……

登紀子 膝はいいのよ、シリコン入りの靴もあるし……

百合子 じゃ何で店員さん募集してんの？

登紀子 ……

百合子 店員急募つて、赤マジックで、お店の前に貼り出して……

登紀子 出しはしたんだけど、どうかなあつて、ここんとか売り上げも悪いし……

百合子 何だ、そうなんだ……

登紀子 せめてバブルの時期ならねえ。出てくるのが遅かつた……

百合子 じゃ、二人でいくのね、店員なしで？

登紀子 うん、まあ……

百合子 （鋭く）大丈夫よ、確かめに行つたりしないから……

登紀子 え……（と用心する）

百合子 （吹き出し）もうっ、用心しちゃって、やだあ……（と、笑う）

登紀子 ……（どう反応すべきか用心する）

百合子 わかったわかった。配達の際はあきらめます。

保 えっ！

百合子 未練たらしい顔すんじゃないわよ。幸介なんて、前が前だもん。これ以上叔母さんを困らせ

たって……

登紀子 そういうんじゃないって、景気の方が……

百合子 （明るく）わかってるわかってる。幸介にはうまく言うから。

保 姉貴い……

登紀子 ……ちよつと、お庭見せてもらってもいい？

百合子 どうぞ。足元、気をつけてね。

登紀子、ガラス戸から外に出る。

保 いいのかよ、あんなにあっさりあきらめちゃって……

百合子 馬鹿だね、これで決まりだよ。

保 決まりって？

百合子 店員は幸介よ。

保 何でわかる……？

百合子 わかるじゃない、こういう意識の流れはさ……

保 博打うちだなあ、姉貴も……

百合子 まあ勝つんじゃない。庭に出るのは二度目だからね。

保 どうだかね。無罪放免されたってんで、また見たくなつたとか……

百合子 たとえこつちが負けたとしても、あつちだつて店員雇えないわよ。私が必ず確かめに行くつて、たぶん思い知つたろうから……（低く笑い出す）

保 （不気味そうに見て）姉貴い……牛乳飲んだら？

百合子 小市民め、今さら、膝が痛くないなんて、断固認めない。腰痛も出てないなんて、超しらばつくれ御用心主義は断固……

真弓が下りてくる。

真弓 ねえ、叔父さんにも頼んでるって言わないの？

百合子 （ガクッと伏せて見せる）……

保 （真弓に）ちよつと待ってくれないかなあ。叔母さんで決まりそうなのよ。

真弓 叔母さん、引き受けるって？

保 今、お庭で考慮中つてとこらしいんだ。

真弓 そう言ったの？

百合子 言ったとか言わないとか、もう勘弁してよお……

保 叔父さんと叔母さん、天敵なんだ。あの二人のソリの合わなさったら、おふくろの葬式でも見てるだろ。

真弓 だけど、もし叔父さんの方から話が来ちゃうと……

百合子 来ないから、叔母さん呼んだんじゃない。

真弓 だから、そう言つときゃいいでしょう。そしたら、もしもの場合だって……

百合子 それは、叔父さんからも来るつて前提よね。

保 昨日の電話の様子じゃさ、叔父さん、動いてないような……

真弓 何ではつきり聞かないかなあ……

保 はつきり聞いたよ、そしたら、うん、動いてはいるつて……

真弓 じゃ、動いてるんでしょう。

保 建前としちゃ言いますよ。

真弓 建前としては言つたんなら、この際両方をお願いしたつて、叔父さんにも叔母さんにも……

百合子 叔父さんは駄目よ！ 絶対に駄目！

保 あの年代には男の沽券つてヤツがあつて……

真弓 だって、叔母さんが相談に乗り出した以上……

保 乗り出してるか、あれ？

真弓 お庭で考慮中なんでしょ？

百合子 もうつ、この人どうにかしてよ、あんまりわかんない過ぎるわよお……

幸介 叔父さんにも叔母さんにも、僕から正直に言いますよ。

と、階段を下りてきている。

幸介 僕がウダウダしたからさ。だんだん傍観者みたいな態度になつて……

百合子 真弓ちゃん、幸介に何か言つたの？

幸介 姉さん、僕の意志なんだから。

百合子 真弓ちゃんでしょ。正論だけで責め立てられて……

真弓 言いました。そう思つたから。

幸介 でも、今は僕の意志だよ。

保 わかつてる？ もう兄貴だけの問題じゃないんだ。

真弓 保、お義兄さんに任せよう。だったら私、何も言わない。

百合子 私、帰る。

保 姉貴い……

百合子 付き合つてらんないわよ、こつちが必死でやつたつて、どんどん崩してく人がいるんだもん。

好きなようにやんなさいよ。私、帰る！（と、階段を駆け上がる）

保、真弓と幸介を睨み、百合子の後を追う。

真弓 ……いいんですよ、無理しないで。私、もう意見しませんから。

幸介 言います。言わないとかえって面倒になりますから……

真弓、力なく腰を下ろす。

幸介 姉さんもいつからあんなに保守的になったのか。学生時代は、世界同時革命だなんて威勢がよかつたんですが……

真弓 お義姉さんが……！

幸介 活動家っぽい男とつきあつてましたよ。姉さんの下宿に入り浸つて……

真弓 保からはそんなこと全然……

幸介 僕以外は、たぶん誰も知りません。家に帰るときはGパン脱いで、スカートはいて、頭の方もうまく衣替えしましてねえ……麻雀の金せびりに行つて見つけたんです。お陰さまで、以後はそれをネタにちよくちよく……

登紀子、戻ってくる。

登紀子 よく手入れしてるわねえ。百日紅がきれいに咲いて……

幸介 あのを、叔母さん、ちよつとお話がありました……

登紀子 あっ……

幸介 え？

登紀子 百合子ちゃんが何か言つたんでしょ？（と、用心深い顔になる）

幸介 いや、別にそういうんではなくて……（と、つい真弓を見る）

真弓、スーッと台所へ。登紀子、それを目で追う。

登紀子 何であつちに行つたの？

幸介 それよりも、叔母さん……

登紀子 私のこと、怒つてんの？

幸介 怒ってる？

登紀子 百合子ちゃんが言つたんでしょ？ 私が嫌がつてるとか何とか……

保の声（階段上で） 事故るぞ！ 死ぬぞ！

バッグを持った百合子、階段を駆け下りてくる。

登紀子 帰んの……？

百合子 (登紀子を前にして、立ち往生) ……

保 姉貴い……(と、うんざり顔で下りてくる)

百合子 ごめんなさい。私もうマジギレしちゃって……

と、ドアから出ていく。

登紀子 間仕切りした？

保 急用です。急用でマジギレして……

登紀子 嘘。私に間仕切りしたんでしょう？

幸介 僕です。僕に……

登紀子 私はイヤだなんて言っていないわよ。ただ、幸介ちゃんみたいに、いい大学出た人が、ウチみたいな酒屋の店員じゃあつて……

保 そんなのいいですよ。聞いてもらえます？

登紀子 ウチはお金も安いし、ボーナスも出ないし……

保 兄貴、そんなのいいよなあ？

幸介 それはもう、藁にもすがる、いや、叔母さんが藁だという意味ではなく……

と、つい台所を見やる。

保、登紀子もつられて見る。

覗いていた真弓、やんわりと首を引つ込める。

保 兄貴、無視、無視……

登紀子 え、虫？ (と幸介を見回す)

保 ううん、ムシムシする、ね、兄貴……

幸介 (保の語尾に重なって) 実は、昭三叔父さんにも頼んでるんです。

間。真弓、また覗く。

登紀子 ……昭三さんに？

幸介 ええ……

登紀子 私より先に？

幸介 すいません。二またかけたみたいになって……

登紀子 本当お……？ (と保を見る)

幸介 本当です。それを叔母さんに言う言わないでもめて……

庭で犬が鳴く。インターホンから来客の報せ。

保 あれ、誰だろ……（と、救われた思いでインターホンの方へ）

幸介 姉さんは、言うなど、それで怒って帰ってしまつて……

保（インターホンに）はい？

昭三の声 昭三ですよん。突然で悪いね。ちよつといいかい？

保 あのうち、今、登紀子叔母さんが来てて……

昭三の声 えつ、チクオンキが？

保 今現在このそばにいらつしやいます。

昭三の声 あらあら、それはまた、じゃ、ご挨拶もかねて……

保（ロックを解除）どうぞ……

真弓、台所から出てきている。

登紀子 チクオンキ……

幸介 ですから、叔父さんが来たのは、それは僕が頼んだからであつて……

登紀子 チクオンキ、そう言つたよね、今……

保 ガープが吠えてたからなあ……

昭三が汗を拭き拭き入ってくる。

昭三 あらあら、スタンディングでお迎えいただきまして……

真弓、幸介、保、昭三に黙礼。

昭三（登紀子に愛想よく）これはどうも、お久しぶりで……

登紀子 こちらこそ、ご無沙汰いたしました……

保 叔母さん、もし時間がアレだったら……

昭三 いいのよ、私がすぐ退散しますから。（登紀子に）今日はじゃ、幸介ちゃんにご面会つてことで？

登紀子 ええ……

幸介 あのうち、叔父さん、叔母さんにおいでいただいたのは……

保 兄貴、叔父さん血圧高いから……

幸介 あ……

保 まず冷たい物でも飲んでもらおうよ。

昭三 あら、すみませんねえ……

真弓、台所へ行こうとする。

保 いい、俺やるから。叔父さん、突然ぶつ倒れたりしないでくださいよお……（と台所へ）

昭三（笑って登紀子へ）どうも冗談じゃなくてね。危険ゾーンなんですよ、現在も。

登紀子 ご活躍が過ぎますもん……

昭三 いやいや、顧問なんてのは、つまるところ雑用係でね。（登紀子に）あ、どうぞお座りください。

私の方はすぐなんで……

真弓 どうぞ、叔母さんも叔父さんも……

昭三 まま、登紀子叔母さま、お先に……

登紀子 私、ちよつとお庭見せてもらうんで……

昭三 ああ、どうぞ遠慮なく見てやってください。

登紀子、カチンときた様子で、ガラス戸から出る。

台所から見ていた保、真弓の視線に気づくと、引込む。

昭三（幸介に）チクオンキつての聞こえた？

幸介 たぶん……

昭三 あそう……いいんだよ、壊れたつてのがついてないんだから……（と、ソファに座って、真弓と

幸介を見やり）ま、ひとつ暗い顔をしないで……

保（台所から顔を出し、真弓に）おい、冷蔵庫、水漏れしてんぞ。

真弓 えっ、またあ……

昭三 正春さんに直してもらえよ。

真弓 頼んではあるんですけど、忙しいらしくって……（と、行く）

昭三 まあ、修理部門は追い風よ。（幸介に）会った、百合ちゃんとこの正春さん？

幸介 いえ、まだ……

昭三 いい人だよ。親戚に電気関係がいると強いわ。

幸介 あおう、叔父さん……

昭三 心得てるって。チクオンキの前じゃ言わないよ。上で話そう。ちよつと心当たりができてね。

保、飛び出してくる。

保（警戒して）何話してんの？

昭三 一、二、三、感触のよさそうなのがあるのよ。面接の件でさ、ちよつと打ち合わせを……

保 本当ですかあ！ 兄貴い、兄貴い……

幸介 ……

昭三 (幸介の沈黙に) 何だよ。もう緊張したのかい？

いったん消えた登紀子が、ガラス戸の向こうから昭三たちを見ている。

真弓、それを見やりながら、麦茶を運んでくる。

保 真弓い、叔父さん、見つけてくれたよ！

真弓 え…… (と、幸介を見る)

昭三 これからよ、勝負はこれから。俺の紹介だつてことで、年齢制限とつばらつてくれたただけでね、選ぶのは向こうさんなんだから……

保 でも、ここまで漕ぎ着けたつてのは、兄貴い……

幸介 ……

真弓、それぞれの前に麦茶を置く。

登紀子、入ってくる。

真弓 叔母さん、麦茶……

登紀子 ああ、ありがと……

と、抵抗感を示しながら、ソファセットの端の方に腰掛ける。

昭三 (登紀子に) お義姉さんのお葬式以来でしたっけね？

登紀子 ええ……

昭三 あの折は、どうも出しゃばりまして……

登紀子 お陰さまで、助かりました。

昭三 直次郎さんも、お達者で？

登紀子 ええ、もう腰も大丈夫で……

昭三 酒場の上げ下ろしがね、ああいうのは若いのがいないと……

登紀子 腰は大丈夫なんです。

昭三 啓介ちゃんが、お好み焼き屋なんかやめて帰ってきてくりゃいいんだよ。どうせ店持てるわけじゃないんだから……

登紀子 チクオンキ……

ソファの面々、少し沈黙。

真弓はカウンターの方に座り、麦茶を飲んでいる。

保 え〜とつと……

昭三 あ、保君、二階を見せてくれないかな？ 新築祝いで見たつきりだから。

保 あ、どうぞ。惜しい所にビルが建っちゃったけど……

昭三 (登紀子に) じゃ、ちょっと失礼して……

登紀子 どうぞ遠慮なく見てやってください。

昭三 ハハハ、お許しをいただいちゃったか……

登紀子 さつきそう言ってもらったもんで……

昭三 そちら様も遠慮なくごゆるりと…… (と、二階へ)

保 兄貴、来ない？ 叔父さんとは久しぶりなんだからさあ…… (と二階へ)

幸介、真弓の方を見る。真弓、知らん顔をしている。

幸介、登紀子に目礼、二階へ上がっていく。真弓、それを見る。

登紀子 やっぱり仕事なんて頼んでないじゃない……

真弓 いえ、頼んではいるんです。

登紀子 だって今、新築祝いから来てなくて、久しぶりに会ったって……

真弓 それはですねえ……

登紀子 昭三にも頼んだって言えば、私が焦ると思ったんでしょ？

真弓 そうじゃないんです。最初っから説明しますと……

登紀子 保ちゃんと百合子ちゃんが、昭三に頼むはずないもん。弥生町の件のとき、アイツがどんなに卑怯に立ち回ったか……

真弓 弥生町の件？

登紀子 横領よ、幸介の。あ、聞いてなかった？

真弓 聞いてますけど……

登紀子 それをここんちでは弥生町の件って言うの。

真弓 ああ……

登紀子 親族会議でね、もうここまでになったなら、幸介に責任とらせようって、そこまで話はいってたんだから。あの小心者のお義兄さんですら、これ以上甘やかしちゃ幸介のためになんないって、実の父親がだよ。姉さんだって、泣く泣く承知してさ。私もそれがいいと思った。百合子ちゃんも、保ちゃんも泣いたわよ。それをさ、あの昭三が一人一人そのかして、逆転させたのよ。身内から、そんな逮捕者が出ちゃったら、みんなの将来に響くとか何とか。ホントはさ、自分が会社で、あのダンボール屋で後ろ指差されんのが怖かっただけなんだから。自分だけは重役になつてさ、百合子ちゃんにも保ちゃんにも遺産が残らんくしちゃったの、昭三なんだから。二人とも恨んでたよ。あんとさ、昭三の誘いに乗んなかったら……

保の声 (階段上で) 叔父さん、叔父さん……

昭三が、荒い足取りで階段を下りてくる。最下段でよろめき、転びかけた拍子に床に手をつく。追ってきた保と真弓、同時に声をあげ、駆け寄る。

真弓 大丈夫ですか……

真弓と保、昭三を助け起こそうとする。

昭三、二人の手を振り払い、そのまま呼吸を整えている。

じっと見ている登紀子。

保 (床に手をつき) すいません、こんなつもりじゃ……

真弓 どうしたの……？

幸介、階段を下りてくる。

幸介 叔父さん、本当に申し訳ありません……

昭三、立ち上がり、幸介、保、真弓、登紀子を見渡すと、手にしていた数枚の履歴書をまとめて引き破って床に捨てる。

昭三 ……酒屋の店員にしてもらえ！ こっちは二度と、金輪際……(と、さらに何か言おうとするが、

やめて出ていく)

保 叔父さん……(と、追う)

幸介、破れた履歴書を拾う。

じっと動かない登紀子。

真弓、その両方を見ている。

玄関の方からは、言い訳しているらしい保の声。

昭三の声 引っ張るな！ 破れるだらが！

荒々しくドアの閉まる音。

真弓と幸介、何となく顔を見合わせる。

戻ってきた保、惘然とした顔で幸介と真弓を見る。

幸介 ……と、言うわけで、叔父さんにもお願いしておりましたような次第で、どうも、誠に……
登紀子 (急にニンマリし) でも、断ったんでしょ。そこまで義理立てしてくれなくともいいのに

……

幸介 いや、義理立てというのか……

登紀子 わかった、お父ちゃんに聞いたげる。私だって力になりたいんだから……

幸介 え、よろしいんですか？

登紀子 (笑い出し) 死にそうだったわね、今。私の前であんなところ見せて、アイツもさぞかし……
(と、さらに高笑い)

幸介、真弓、保、ただ笑う登紀子を見つめる。

登紀子 じゃ、そんなんで。私もそろそろ……

保 あ、お送りします。

登紀子 悪いわねえ……あ、バッグ……

真弓 とつてきます。(と、上に行こうとする)

登紀子 いいのいいの、も一回見たいから。姉さんあんなところで暮らすこともできたのに……

と、上機嫌で二階へ。

保 ……知らねえぞ。叔父さん、いい仕事持ってきてくれたのに……

真弓 (幸介に) 断ったんですか？

幸介 いえ、叔母さんにも頼んでいと言っただけで……

保 (真弓に) お前が正義感振り回すからだよ。(と、カウンターの抽斗に車の鍵を取りにいく) こっちは
日曜ごとにこんなでつぶされて……

幸介 もう後は自分でやるから、真弓さんに当たらないでくれよ。

保 断れよ、それで叔父さんにもう一度、いや、叔父さんに謝って、その感触で叔母さんの方を……

登紀子、バッグを持って下りてくる。

登紀子 これで昭三も出入りできないわね。姉さんの一周忌にだって顔見せらんないだろうし……

保 (登紀子の前に進み出て) 兄貴、最後はホームレスだったんです。上野公園にテント張ってまして
……

登紀子 ホームレス……(と、急に用心深く幸介を観察)

幸介 (かすかに頷いて) ……

登紀子 昭三は知ってんの？

幸介 いえ、叔父さんには、まだ……

登紀子 (再びニンマリし) そうよね、それ聞いたら動くはずないもん。まあ、私にはそんなことまで
……苦労したんだねえ……

保 叔母さん、じゃ、お送りしますんで……

保、仏頂面で先に出ていく。

登記子 正直になったねえ、幸介ちゃん。普通だったらいろいろ隠すところをさあ。そこところは
お父ちゃんにもよく……

と、言いながら、玄関の方へ。

幸介、真弓も見送りに出る。

幸介の声 どうもご足労をおかけしまして……

登記子の声 いいのよ。私だって力になりたいんだから。ホントに出てくるのがもう一年早かったら

……

「ありがとうございました」と重なる幸介、真弓の声に、保の苛立ったクラクションがまた重なる。

幸介、戻ってくる。遅れて真弓。

幸介 ……

真弓 ご無理なさったんじゃないですか？

幸介 そんなことないです。

真弓 何だか叔母さんの引き受け方が……

幸介 叔父の方のは、どうせ務まりませんから。履歴書がね、だいぶ変えられておりまして、あれで
入社したら、相当期待されてしまうでしょう。また、嘘も積み重ねなきゃならないし、ストレス
で博打なんてことにも……

真弓、幸介から離れて座る。

幸介 保だって、そのうち機嫌直しますよ。姉にも叔父にも僕から改めて……

真弓 ……

幸介 おジャマですね。お仕事入ってるんですもんね。どうぞ、お仕事を……お仕事の気分じゃない
ですね……

真弓 大した仕事じゃありません。エステサロンの体験取材、ケーキのおいしいあの店この店……

幸介 それだって、立派ですよ。文章でお金を稼げるなんて……

真弓 ……

幸介 僕は文章が下手でねえ。嘘つきだからかな。真実を見極めようとする目がないんでしょうねえ
……

真弓 嘘つきは文章うまいですよ。

幸介 じゃ、あなたは正直過ぎて、あ、失礼……

真弓 正直な人もうまいです。その真ん中が下手なんです。私はその真ん中です。

幸介 ほう、そういうもんですか……

真弓 その真ん中が、偉そうに正論吐いて……

幸介 真ん中にだって正論は必要です。いや、真ん中だからこそ、あ、あなたが真ん中かどうかはともかく……

真弓 ちよつと静かにしていただけませんか……

幸介 あ、静かに、はい、静かに……

二人、そのまま沈黙する。

4

翌日の夜。明かりはついているが、誰もいない部屋。

保が仕事から帰ってくる。

保、書類カバンをソファに投げ出すと、ネクタイをゆるめながら、台所へ向かう。

電話が鳴る。保、缶ビールを飲みながら戻ってくる。

保 (受話器を取り) 中村です……あつ…… (と、急に腰を折り曲げ) 昨日はどうも、いやあ、もう、何てお詫びをしたらいいかって、一日中そればかりで……あのう、お身体の方は？ ……ああ、それならよかった……えっ……はい……はい………本当によろしいんですかあ！ ……ええ、別にあっちが確定ってわけでも、兄貴だって、そんなに嬉しそうじゃありませんね。ただ、あんな具合になっちゃったもんで……兄貴ですか？ 僕も今帰ったところでして、ガープがいらないから散歩に出てるんじゃないでしょうか。帰ったら、すぐ伝えますんで、折り返しこっちから……はい………恐縮です、そこまで言っていただいて…… (笑い出し) またあ、またまたあ、顔ですよ、叔父さんの顔……はい、はい、じゃ折り返してことで、はい…… (と、切る)

保、真顔に戻り、ビールを一口ひっかけると、受話器を持ったままソファに移動。百合子に電話する。